

1. 新約聖書の成立事情

先ず第一に私たちが理解しておかなければならないことは、旧約聖書の中には一部に世俗の文学(愛国的、宗教的関連でー ルツ記、エステル記、雅歌など)が含まれていることはよく知られていますが、新約聖書は始めから終わりまでそのすべてが、宗教的な文書のみで構成されているということです。

もちろん新約聖書の思想は、初期のキリスト者たちの宗教体験から生じたものですが、それは旧約聖書とユダヤ教という既存の枠組みを土台にして形成されました。他にも当時のいろいろな時代的背景や影響があったとはいえ、それらを遙かに超えて旧約聖書が果たした役割は大きく、また決定的でありました。

その出発点において既に、教会とシュナゴゲー(ユダヤ教の会堂)との間には、旧約聖書の解釈において緊張関係がありました。教会は、離散のユダヤ人(使 2:5 参照)から LXX(ギリシア語に翻訳された旧約聖書)を引き継ぎ、会堂の祈りや組織運営の形を受け継いだとはいえ、正統的ユダヤ教の理解に対して、もっと高度で真実な旧約聖書理解というものを主張しました。それは彼らが、自分たちこそが真のイスラエルであると認識した(ガラ 6:16 参照)ことに起因しています。

最初期のキリスト教は、あたかもユダヤ教の一派のようでありましたが(ルカ 24:52f)、ごく早い時期にユダヤ教とは袂を分かちます。キリスト教こそは古いユダヤの宗教の完成であり、律法と預言者はキリストを指し示し、待ち望んでいたと理解したからです(ルカ 24:25f, ヨハ 5:39, 8:56, 1ペト 1:10ff)。そのため、旧約聖書はユダヤ教から取り上げられてキリスト教会のものとなり、今や新しい、かつてとは異なる解釈が採用されるという、世にも珍しい現象が起こったのでした。

AD.70 年のエルサレム神殿破壊と AD.135 年のユダヤ国家消滅は、もはや新しいキリスト教に何らの宗教的影響を及ぼしませんでした。その頃にはキリスト教会はほぼ完全に異邦人世界のものとなっていました。何よりも教会は初めからいわば神殿の消滅と犠牲の祭儀の廃止を先取りしていたからです。

原始教会が自らの存在の根拠を旧約聖書に求めたことは明らかであって、議論の余地はありません。すなわちキリスト教はユダヤ教が用意していた聖なる書物を携えて、ローマ世界に登場したのでした。ただその新しい解釈と、自ら生み出した新約聖書の追加を伴って。

キリストの“出来事”は、生ける神の究極的な啓示であって、神は人間の罪からの贖いを通して「世を御自分と和解させ」(II コリ 5:19)、ついには神の国を完成されるのです。

このように新約聖書の神学は本質的に、初代キリスト教会によって新しく読み直され解釈された旧約聖書思想の、さらなる継続と展開なのです。ですから私たちは、新約神学のあらゆる面で、いつも旧約聖書を考慮に入れなければなりません。

しかし、ここで注意しておかなければならないことは、旧約聖書も新約聖書もいずれも、組織的な神学というような、哲学や学問から生み出された原理や結論とは、およそ無縁な書物だということです。

聖書神学と呼ばれるものの起源は、16 世紀のトリエント公会議によって頂点に達したカトリシズムへの対抗として、プロテスタント陣営が生み出したものです。聖書のみを唯一の権威とすることから、聖書の中の神学的知識を組織化する必要があったからです。

その場合の前提となったのは、創世記から黙示録まで、聖書全体を一貫する唯一の教理というものが存在するという仮説でありました。それはカトリシズムの権威から解放された神学であり、聖書はそれだけで完結した規範であるという理解です。しかし、事柄はそれほど単純ではありませんでした。その当時から今日に至るまで、だれも「これが最終的な聖書の教理である」というようなものを作ることは成功しなかったのです。

新約聖書の中には実際には、当然のことながら、たくさんの違った傾向の解釈や理解が混在しています。しかもそれらは互いに重なり合っていて、共観福音書相互の共通点と同時に雰囲気の違いとなり、同じパウロの手紙でもそれぞれの場面や状況、さらには目的によって姿勢や口調が異なって来たりします。

もちろん福音書に保存されているイエスの言葉についても、同じことが言えます。たとえばイエスの称号として、ダビデの子、人の子、メシア、主、神の子などが登場しますが、実際にイエス自身が同時にそのすべてを認めていたのか、それとも生涯の時期によって順に使分けただけなのかははっきりしません。ただ推測されるのは、キリストはそれらの称号が意味する内容のすべてを実現されたと、初代教会が理解したということです。

原始教会には、恐らくこれら以上に多くの異なる伝承の理解や解釈のいろいろな傾向があって、それらがやがて整理されることによって、最終的に ロマ 1:2-4 のような形に集約されて、新約聖書に収められたと考えられるのです。

2. 新約聖書神学の前提

私たちの前には、すでに完結して、代々の教会の正典として受け継がれて来た、新約聖書という書物があります。それを構成する多方面な福音理解や神学思想の形成過程を復元したり、それら相互間の関係や展開を順序づけることは、必ずしも可能であるとは限りません。

それらは、イエスから原始教団へ、そこからパウロへ、そしてヨハネ文書へと一直線の発展をして来たものではありませんでした。むしろそれらは、池に石を投げたときに出来る波紋のように、同時に全方向へと展開したのです。ですから新約聖書神学の仕事というのは、このような初期キリスト教思想の多方面な展開を材料にして、キリスト論の解釈を試みて行くことなのです。

たとえば「剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタ 26:52) に対して「剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい」(ルカ 22:36) があり、「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない」(マタ 10:34) に対しては「平和を実現する人々は、幸いである」(マタ 5:9) というイエスの言葉があります。もしこのような(前後関係から切り離された)聖句を、その背景や意図を考慮せずに金言化したり、そのうちの一つだけを絶対視して聖書全体を解釈する鍵として用いたり、キリスト教倫理を構築しようとするなら、それは健全な新約聖書神学とは呼べないでしょう。

聖書神学の課題は徹頭徹尾、キリスト教会の正典、すなわち教会に委ねられた啓示の書である聖書のメッセージ(神のことば)を聞き取る(解釈する)ことであって、そこからある教義や原理を結論づけることではないのです。

他方また、あたかも聖書が教会とは無関係に、ある日突然天から人類に与えられた、時代を超えた永遠の真理の書であるかのように考えることも、たいへん危険なことです。

聖書神学には、聖書本文の分析や批評と共に、その背景となっている歴史やもろもろの思想や世界観を理解したり洞察することが必要になります。当時人々にとって人や家畜が住む地球は平らであり、創造からまだ三・四千年しか経っていませんでしたが、十分に太古の話でありました。この地を神と天使たち、および諸々の霊の住み処である複数の天が幾重にも覆っていて、地を支配していたのです。そのような当時の思想や世界を無視して、現代人の感覚で聖書から直ちに神の真理を抽出しようとするのは、全く見当外れなことです。

現代の一般人はともすると、古い時代の書物を、その思想が未開で原始的であると早合点したり、軽視したりしがちです。しかし聖書という書物を、安易に現代の一般的教養人たちが、自分たちと同じ思考レベルに引き下げて、歴史的批評的研究なしに論ずることが出来ると思ってしまうことは、愚かな誤解です。

私は一般の信者が、翻訳された聖書を先ず「あるがままに」読むという素直さを、持ってほしいと思います。新約聖書が書かれた時代や、それを弁証するために労した教父たちの時代、基本信条を確定した諸公会議の時代に帰った気持ちになって、精一杯空想力を発揮して読んでみてほしいのです。当時の人々は当然、読者が聖書の記述を、本気でそのあるがままに読んでくれることを期待したのです。

それらの人々が命をかけて、聖書がそこで伝えられ受け継がれて来た教会のために戦った、その同じ信仰を、聖霊が現代の私たちにも与えてくださることを祈ろうではありませんか。聖書は、代々の教会の信仰から切り離しては学び得ない書物なのです。もちろんこのことは、教会の権威が神のことばの上にあるという意味に解してはなりません。

しかしこれは、いわゆる近代の逐語霊感説のように、聖書の記述をそのまま現代的感覚での「誤りなき真理」として「強引に信じる」ということからは区別して考えなければなりません。歴史の隔たりと世界観の相違を考慮することなく、現代的感覚で聖書を論じることも、あるいは聖書を現代の科学的文書の一つのように妄信することも、いずれも間違っているからです。

3. 今日の聖書解釈

聖書には、神の啓示が記録されています。それは聖霊に導かれた人々によって書かれ、伝えられて成立した書物です。ですから聖書の靈感という概念は、これを書き、編集し、伝えた人々の靈感の上に成り立っています。そして教会に与えられている課題は、この聖書が伝える啓示を今という時代にどのように解釈し、適用して行くかということなのです。

しかし、この聖書の解釈ということこそが、実はキリスト教界における最も困難な問題なのです。聖書を正典としている教会が、その解釈についても権威を持っていると主張するのは、ある意味で当然のことです。そして教会の歴史は事実、使徒たちの時代から今日に至るまで、その様々な解釈によって紡ぎ出された歩みの歴史でありました。いつの時代にも教会の歩みは、その最初の靈感を継承することによって、聖霊の導きの下に立ち続けて来ました。

今日の聖書解釈は、最早その歴史的批評的研究を無視しては成り立たなくなりました。しかしキリスト教界の実状はなお、聖書の諸文書が書かれたそれぞれの時代の、社会的、経済的、あるいは宗教的背景などを無視して、ただ文字通りの解釈に固執するファンダメンタリズムや、特殊な解釈を主張する分派、さらには全く私的な非教会的解釈などとの緊張関係の中にあります。私たちはそのような人々の信仰深さや熱意は尊重しても、彼らの知的能力の致命的欠陥を無視することは出来ません。

新約聖書を文字通りに解釈するという事に起因する近代の最大の悲劇に、反ユダヤ主義があります。この反ユダヤ主義の歴史そのものは、キリスト教以前の時代からのものです。しかしその存続に手を貸したのは、間違いなく教会でありました。なぜなら反ユダヤ主義は新約聖書そのものの中に温存され、その悪影響を差し止めるべき行動を、過去の教会はほとんど全く怠って来たからです。

第二バチカン公会議は、その公文書「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度について宣言」の中で、初めて過去のユダヤ人に向けられた憎悪と迫害を糾弾して、次のように述べました。

「あたかも聖書から結論づけられるかのように、ユダヤ人は神から見捨てられた者としても呪われた者としても紹介されることがあってはならない。」

しかし今日に至るまで、教会の指導者や説教者、また教養ある信徒たちの多くが、気づかずに聖書に保存されている反ユダヤ主義的偏見に汚染されたままにしている事実は、やはり否定出来ません。その最悪のテキストが、ヨハ8:44であるかも知れません。

「あなたたちは、悪魔である父から出た者であって、……」

率直に言って、ナザレのイエスが本当にこんな発言をしたとは信じられないことです。この場面での相手は確かにユダヤ人ですが、イエス自身もユダヤ人だったのです。もちろんここや他の箇所でも、ユダヤ人と翻訳せずにユダヤ教徒とするべきだという学説もあります。しかしそれよりも、ヨハネ福音書そのものがユダヤ教への反論文書であることを理解すべきなのです。この福音書は、イエスの生涯の歴史的記録ではなくて、キリスト到来の事実が持つ1世紀末あるいは2世紀初め頃の教会にとっての意味を、ドラマ化した作品なのです。そこにはキリスト教会がユダヤ教の会堂から分離して行った、当時の両者間の緊張関係が反映されているのです。

「あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。……兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。」(マコ13:9-13)

既存のユダヤ教徒に抵抗するには未だ少数者であったキリスト者側は、彼らの初期の伝承を反ユダヤ主義的な色合いで語ることによって、結束しようとしていました。イエスの処刑の物語りは、明らかにローマの法律による十字架刑であったにもかかわらず、その責任はローマ総督にではなくてユダヤの最高法院に帰して語られました(ヨハ18:31)。

同様にイエスの教えの数々も、恐らく福音書に編集される以前の口伝の過程ですでに、反ユダヤ主義的な方向へと偏向して伝えられました。そして遂にヨハネ福音書で、それが頂点に達したのでした。

私たちはかつての捕囚から帰還後のユダヤ教団が、バビロンへの敵意と復讐心を彼らの詩の中で歌った詩137:8fに、その見事な前例を見ることが出来ます。

以上はほんの一例に過ぎませんが、聖書を単純に文字通りに解釈しているのでは、迷路を脱出することが出来ません。現代の進歩した歴史的批評的研究を無視しては、今日の聖書解釈は最早成り立たないということを、教会の指導者や説教者、また教養ある信徒たちの多くは学ぶ必要があります。残念なことに現状においては彼らの大部分が、特に聖書神学に関しては驚くほど無知無学である!! という事実、私は警鐘を鳴らしておきたいと思えます。